

令和3年度 江戸川区立葛西小学校 学校関係者評価 最終評価用報告書

学校教育目標	○心ゆたかな子ども ○最後までやり抜く子ども	○よく考える子ども ○健康な子ども	目指す学校像 目指す児童像 目指す教師像	・保護者にとって、子どもを通わせてよかった、と思える学校 ・「確かな学力」「豊かな心」「健康な体」をバランスよく備えた子ども ・人権尊重の精神に富む教師。保護者や地域との連携に努め、誰からも慕われる教師
前年度までの学校経営上の成果と課題	<p><成果>併設型小中学校の開設から2年目となり、前年度以上に小中との合同行事をはじめとする生活指導面、学習指導面での連携に着手できた。新型コロナウイルス感染症予防に全教職員で協働して取り組むことができた。カリキュラムを組み替えたり、授業を工夫したりと各学年の学習内容の未履修がないように努めた。</p> <p><課題>併設型小中学校の更なる教育活動を推進する(カリキュラム・マネジメントによる学力の向上、小中9年間にわたる生活指導の継続、心の教育の充実)。</p>			

教育委員会重点課題	取組項目	評価の視点	具体的な取組	数値目標	自己評価		学校関係者評価		来年度に向けた改善策
					取組	成果	成果と課題	評価	
いきいきと学ぶ学校づくり	確かな学力の向上	・「確かな学力向上推進プラン」の実施・改善や補習の実施などによる指導の充実と授業力の向上	・全教員の授業公開 年1回以上 ・放課後補習教室 年35回以上	・単元末のテストで8割以上の児童 低学年 9割 高学年 8割 ・補習教室の実回数年35回以上	B	B	●学期末テストで8割以上の児童 低学年 7割 高学年 7割 ○各学年の研究授業等で、全学級の授業公開が出来た。 ○補習教室は計画的に実施。	A	・不得意な教科とならないよう、興味をもつ続けられるような工夫を期待する。7割達成は及第点ではないが、 ・全児童がタブレットを所持していることから、オンライン等の支援が更にあっても良いのでは。 ・教科担任制を活用した、教師の授業力向上と、授業内容の工夫・改善。 ・放課後補習教室の充実と、教員による個別指導の実施で、基礎基本の更なる徹底を図る。 ・オンラインについては、児童の発達段階に応じた活用を進める。
	読書科の更なる充実	・読書を通じた探究的な学習の充実(読書科ノートの活用、資料の収集の仕方や記録の取り方の指導、自己の考えをまとめ表現する方法の指導、朝読書と1単位時間の授業との関連付け、他教科との関連等) ・学校図書館の整備、学校図書館を使った授業の充実	・図書館を活用した調べ学習 高学年 学期3回以上 ・図書館での読書活動 低学年 毎週	・調べる学習参加…50人 ・年間読破 低 80冊 中 60冊 高 30冊	A	B	○全学年図書館を活用した調べる学習は学期3回以上実施できた。 ○朝読書の時間活用は適正に実施した。 ○年間読破数はおよそクリアできた。 ●調べる学習の参加 13人 ・児童の学習用タブレットとの併用を考えていく。	A	・紙で製本されている本の良さを、今後とも伝えてほしい。紙のもつ良さも伝えてほしい。 ・調べる学習により、考える力が身につけてきている。 ・図書館には多くの本が並んでいる。本と触れ合う環境が整っている。
	体力の向上	・体育の授業や休み時間における全校運動遊びなど主体的な運動の実施による運動意欲の向上	・走る・投げるを中心とした運動遊びの実施 ・冬期、持久走タイムの実施 ・なわ跳び月間の実施、長なわ跳び記録会	・全校運動遊び 年間 20回 ・持久走の記録の伸び 初回の記録からの更新 ・個人目標達成100%	B	B	○体育の授業では、走る運動や投げる運動を多くとり入れた。児童の動きがスムーズになった。 ●コロナ禍のため全校運動遊びが実施できていない。 ・状況にあった内容を見直す。	A	・コロナ禍での体力の維持・増進は早急な課題だと思う。 ・校庭や屋内運動場を活用し、継続して体を動かす授業を行っていた。 ・全校運動遊びの計画を立て、体力テストで課題となった、投力を重点とした取組を行う。 ・体力作り月間を年間計画に取り入れ、個人個人に体力作りのめあてをもたせて取り組ませる。
	オリパラ教育の推進	・「オリンピック・パラリンピックレガシー創造プラン」に基づく取組、「学校2020レガシー」の設定やオリパラコーナーの充実	・図書館にオリパラコーナー特設 児童玄関前フロアの活用 ・ボランティア活動、挨拶運動の実施	・オリパラ読本、コーナー活用 の授業 高学年全クラス実施 ・4年 国際理解教室実施 年2回 ・挨拶運動 年2回	B	B	○オリパラ教育については計画通りに実施。スポーツ体験も行った。 ○国際理解教室を通して、児童の国際理解が深まった。 ○挨拶運動は中学校と合同実施。連携もできた。 ・レガシーを今後どう生かすかが課題。	B	・国際理解教室や中学校との連携は良い実践である。 ・今年度は夏季及び冬季オリンピックが開催されたので、もう少し児童が興味をもつ取組があっても良かった。
	外国語教育の推進	・授業力の向上とALTの効果的な活用	・小中学校教員の授業交流 ・授業でのALTによる正しい発音の提示 ・休み時間のALTとの交流	・中学校教諭とともに作成した指導案による授業を実施 年2回以上 ・中学校教員の乗り入れ授業 6年各クラス 2回	A	A	○中学校教諭とともに作成した指導案による授業を2回実施。外国語科の学習の進め方の共通理解をした。乗り入れ授業ではなく、T2として指導案作成から協働できた。 ○授業において、ALTを効果的に活用し、正しい発音を児童が聞くことができた。	A	・学校での取り組みでは物足りないという声もあるが、学校ならではの取組や活動に期待する。 ・中学校との連携、ALTの活用は良い。このまま学力向上につながっていくと思われる。
特別支援教育の充実	健全育成に向けた取組の強化	・いじめ・不登校の未然防止に向けた魅力ある学校づくりの取組の充実 ・チルドレン・サポートチームや生活指導連絡協議会の活用	・生活指導夕会での情報共有 毎週 ・年3回の生活指導全体会 校内委員会 随時	・いじめ・不登校早期発見 早期解決 年度末いじめ・不登校未解決 0 ・不登校個人カルテの記録	B	B	○週1回の生活指導夕会での情報共有、教員の意識向上により、いじめに対して早期発見、早期解決ができた。 ○不登校児童のカルテ作成は随時行っており、過去にさかのぼって兆候を知る資料として活用できた ●不登校児童は、現在12名。改善が課題である。	B	・家庭環境など、学校が立ち入れる範囲での改善は難しいだろうが粘り強い対応をお願いする。不登校の要因は学校側だけの問題ではないため、できることを継続して取り組んでいただきたい。 ・コロナ禍の影響もあるだろうが、PTAとしてもできることはないか考えたい。 ・夕会の成果が出ている。不登校児童カルテの作成は良い。
	特別支援教育の推進	・校内委員会の活性化を図ることなどによる指導・支援の充実 ・ユニバーサルデザインの視点を取り入れた個に応じた指導の充実 ・エンカレッジルームの活用促進 ・副籍交流、交流及び共同学習の充実	・コーディネーターまたは講師による研修会実施 年1回 ・ユニバーサルデザインを考慮した教室環境整備 通年 ・巡回指導教員との連携 随時 ・副籍児童との交流 年1回	・学校評価での肯定的評価 9割以上 ・巡回指導教員との情報共有 毎回 ・エンカレッジルームの整備 (1学期中)	B	B	○巡回指導教員とコーディネーターや担任との連絡を随時行なった。個に応じた指導を行うことができた。 ○教室環境は学年で統一している。 ●特別支援教育への理解を深める研修会や副籍児童との交流を実施する。	A	・研修会等の時間の確保は今の現場での課題である。 ・推進のための取組は良く図られている。 ・巡回指導教員による研修会を1学期の早い段階で実施し、個に応じた指導の共通理解を図る。 ・校内委員会の内容を全教職員で共有し、支援の方向を理解して実践する。
特色ある教育の展開	教員の資質向上	・学習用タブレットを活用した授業実施に向けた研修	・ICT校内研修 年3回以上実施 ・情報主任によるICT活用授業 公開年3回以上 ・学年間の授業参観	・教室でのタブレットPC活用 全教職員 週1回以上 ・全児童がタブレットを活用できるようになる。	B	B	○情報教育担当の研修及び授業公開は計画通り実施できた。全教員、学習用タブレットの活用を積極的に行った。 ○児童の学習用タブレット操作への理解を深めることができた。 ●授業力の向上の為、日常的な授業参観・意見交換の場をもつ。	A	・GIGA構想やICT技術を日常使いこなすには、根拠と理解が必要。 ・教育現場はかなり変わってきている。教員は大変であるがうまくやっていく事が肝要であろう。 ・GIGA,ICT等、どのように活用していくか、いかに学校教育に応用するのか、教育の場が広がったと前向きにとらえていくと良い。
	小中連携教育の更なる推進	・「小中を通じたカリキュラム・マネジメント」による学力の向上及び「各教科等の連携教育プログラム」による連携の充実	・校内研を核として、算数・数学の系統性確立 ・外国語活動、外国語科の授業づくりを中学校教諭と行う。	・小中学校の算数や数学の授業参観 学期1回以上 ・小中相互授業参観 毎月1回	A	B	○小学校の算数の校内研究では中学校の数学教員の授業参観、指導助言も受け、系統性を意識した授業を展開するようになった。 ●月に1回の小中相互授業参観は十分に実施できなかった。参観できる日程を調整していく。 ○外国語科の授業を中学校教諭と考えることができた。	A	・さらに積み重ねる時間を設けてほしい。 ・小学校と中学校の教員同士の交流や情報交換が図れていることは、施設併設校であるからその取組である。 ・算数と数学の授業参観は研究授業を中心として行い、意見交換の場を設ける。 ・校内研究の際は、中学校までの系統表を作成し、事前に受けた中学校教員からの助言や指導を授業に活かす。
国際理解教育の推進	国際理解教育の推進	日本語学級と連携した、国際理解の醸成とグローバルな視野をもつ児童の育成	・教員による、日本語学級での授業理解 ・国際理解教室における児童の相互理解	・全教員日本語学級の参観 ・4年生との国際理解教室実施	A	B	○国際理解教室を実施した4年生児童の国際理解が深まった。 ●他の学年への意識を高めていくために、掲示物などで日本語学級をアピールする。 ●小中連携週間を活用し、全教員が日本語学級の参観をする機会が設ける。	A	・児童・教員だけでなく、PTAを通じて保護者の間でも理解が深まる活動も検討してみたい。 ・国際理解教育の推進に、日本語学級との連携は良いアイデアである。 ・低学年では難しいと思われるが、高学年を中心に取り組む機会が増えれば良い。